

ヒラリーのアメリカ 民主党の秘密の歴史

ディネシュ・ドゥスーザ

Regnery Publishing, 2016

書評：Tadashi Hama

歴史というものは、表面だけを見れば、作用と反作用の繰り返しであり、永遠に岸を洗い続ける波のようなものに過ぎないのではなかろうか。歴史を完璧に把握し、歴史から学ぶためには、この波濤に翻弄され続けてはならない。そのレベルから脱却して、波を作り出している人間に目を向けることが必要だ。すなわち、歴史を完全に理解するためには、人間と背景が重要な要素になってくる。歴史上の出来事を見てみると、あの重大な決定を下したのが別人だったならば、歴史はどうなっていたらどうかと考えたくなる。たとえば、第一次世界大戦後のヴェルサイユ平和会議の席で、日本は、国際連盟規約に対して、人種平等規定を含む改正案を提出したが、会議の議長だったウッドロー・ウィルソン米大統領に却下されてしまった。ウィルソンはなぜ日本の提案を斥けたのだろうか。また、ハリーマン・トルーマン米大統領が日本への原爆投下を命令した時には、周囲の人々は必死に阻止しようとしていた。また、政府も日本が真剣に戦争の終結を望んでいることを知っていた。それなのに、トルーマンはあの残虐行為を敢行したのである。トルーマンの原爆使用を弁護する人々は、彼は戦争の早期終結を望んだだけで、他意はなかったと主張する。しかし、その考え方はあまりにもナイーブだろう。ウィルソンもトルーマンも、選挙を経て、アメリカ合衆国の最高の役職に任ぜられたのであるが、どちらも民主党員だった。二人の行動が、一つには民主党の歴史と哲学に起因しているのではないかと考えることができるのではあるまいか。

作家であり映画監督であり政治評論家であるディネシュ・ドゥスーザは、二人の行動が民主党の歴史と哲学に起因するという説に与している。近年、民主党およびその「進歩的」な支持者たちは、アメリカ・インディアンと黒人奴隷の虐待について喧々囂々の非難を浴びせている。非難の対象は、前者の場合は「白人の米国人」であり、後者の場合は、「南部」である。しかし、ディネシュ・ドゥスーザは、詳細に見てみると、こういう米国の諸悪はみな、全面的に民主党が責任を負わなければならないものだとして主張している。一般には、民主党は「庶民」の党であり、「人種的平等」「社会正義」「機会の平等」を目指す政党だと信じられているが、ドゥスーザは、その考えを真っ向から否定する。すなわち、民主党とはそもそもの結党のときから、「搾取と殺戮と略奪」とさらには「白人の優越」のための政党だった、とドゥスーザは主張するのである。

本書の読者は、民主党の結党の父が、「庶民の大統領」として知られるアンドルー・ジャクソンであることはご存知だろう。ジャクソン「およびその一味」は、大統領に就任する前に、アメリカ・インディアンの土地を武力と脅迫と恫喝によって略奪し、わずかな利益のために、その土地を貧しい白人入植者に売却したのである。ジャクソンが謀略によって得た土地は、後に、南部の五州になった。そ

の報酬として、白人入植者たちは、1828年と32年に、ジャクソンをホワイトハウスに送り、民主党に政治的忠誠を誓ったのである。大統領になってからのジャクソンは、インディアンに、ミシシッピー川の西岸に移住するように強要した。政府はそれ以前に、インディアンを保護するという条約を結んでいたのだから、明白な背信行為だった。移住できないインディアンは「強制収容所に収容」された。後年、第二次世界大戦の最中に、民主党政権は日本人を強制収容所に送ることになるが、それと同じことをすでにしていたのである。本書は、インディアンを追い立てて無主となった土地を、白人入植者がすみやかに買い取って、ジャクソン一味に経済的な貢献をしたことを指摘する。このような「土地泥棒」の功績によって、ジャクソンは「庶民」の間で「絶大な人気」を博した。ジャクソンのインディアン虐待は闇の歴史を切り開くことになった。つまり、「その後の民主党の略奪、残虐、頑迷、窃盗行為の嚆矢となり」、彼の「信奉者たちが、南北戦争に至るまで、民主党を支配するに至った」とドゥスーザは言うのである。

ドゥスーザはさらに、民主党が「奴隷制度」の党であることを証明する。つまり、この制度が許されていた州では制度を死守し、さらに新たに米国の州となった地域にもこれを広げようと全力を尽くしたのだった。民主党の支持基盤だったのは、奴隷所有者および奴隷制度を「社会の自然で正常な状態」と見做していた人々だった。ドゥスーザの指摘する所によると、北部の民主党員も奴隷制度を支持しており、「南部人」だけが奴隷制度を支持していたという迷信は根拠がないとのことである。奴隷制度を擁護する支持者たちは、奴隷たちは食事も住む場所も与えられるなど、さまざまな面で優遇されていたのだから、この制度は、奴隷にとっても主人にとっても素晴らしいものだったと言っていた。（1858年、共和党の上院候補エイブラハム・リンカーンは、奴隷制度を揶揄して、「『あなた働く人、私食べる人、あなた労働する人、私その成果を楽しむ人』と言ったものだった」

ドゥスーザは、現代の福祉国家のビジョンを描き出したのが民主党であり、そのビジョンが19世紀の南部のプランテーションに酷似しているのは偶然の一致ではないと示唆する。このビジョンとは、国家（つまり奴隷主）が市民の福利に責任を持つべきだというものなのである。白人貧困層に、安く土地を提供し、家を建設させたのはジャクソン政権だった。奴隷制度は「積極的な善」と見做された。黒人を、その労働の対価として、揺り籠から墓場まで面倒を見てやるのだから恥じる所はないというのである——どのプランテーションも、奴隷主を長とする「小さな共同体」だった。

南北戦争の後、奴隷制度が廃止されると、民主党は、それまで奴隷州だった場所で、白人の支持を集めるために、「白人の優越性」をキャッチフレーズに使った、とドゥスーザは述べる。——「これは、民主党の戦略の重要な部分だった」その時にもまだ、民主党は南部では権力を維持していたので、法的な策略を弄した。元奴隷が法的な権利を十分に行使して、共和党を支持することができないよ

うな法的障害を設けた。ドゥースーザによると、南北戦争前の時代に、一貫して奴隷制度に反対していたのは共和党だったということである。共和党が憲法を改正して、奴隷制度を非合法とし、解放された黒人に米国市民としての完全な法的権利を与えたのである。その中には選挙権も含まれていた。1870年代から1930年代まで、人種隔離がおこなわれていた南部は民主党に支配されていたが、他の州は大半を共和党が支配し、1865年から1920年代まで、ほとんどの大統領選挙は共和党の勝利に終わった。

こうして、ウィルソン大統領とトルーマン大統領を、民主党の歴史に照らして評価することができるようになった。民主党が彼ら二人の思想の元になってのではないかもしれないが、ふたりとも南部民主党の中で育ったのであり、他の民主党員と大筋において一致する所が多かったとみられるのである。このふたりがそれを選べるようになった時には民主党に傾倒し、思想的に民主党に全面的に同調するようになっていた。今日では、政治的に正しいとされる社会的雰囲気は確立されてしまったので、ウィルソンやトルーマンの忌まわしい過去を暴き出すことは、学校の歴史教科書ではとうてい不可能なことであろう。ドゥースーザのような人でなくては、真実に挑戦することができないのである。

たとえば、1915年にウッドロー・ウィルソン大統領は、ホワイトハウスに閣僚を始めとするゲストを招待して、映画「国民の創生」(The Birth of a Nation)の試写会を行った。クー・クラックス・クランは、ドゥースーザによれば、民主党の「テロ担当部門」なのであるが、この映画は、この団体を英雄扱いして北の国旗組を引き受け、南部の栄光を守るものになっている。映画は、ウィルソンの著書「アメリカ国民の歴史」(A History of the American People)をもとにしており、ここからの資料引用が多い。クー・クラックス・クランは、英雄的な白人種の救世主として描かれているが、その実態は、黒人にテロを行って、政治的権利の行使を妨げることだった。クー・クラックス・クランが「民主党の『テロ担当部門』」だったという主張の根拠として、ドゥースーザは「KKKの有力リーダーのほとんどが民主党員だった」と指摘している。

大統領候補となったウィルソンは、民主党の白人優越主義政策に同調した。1912年に行った演説では、中国人と日本人は米国に同化することができないからという理由で、その移民に反対した。「コーカサス人種との調和を拒む人々と一緒では、均質な社会を作ることができない。東洋の肉体労働者が入って来ると、別の問題が生じて来る。すでに我々はその教訓を学んだはずだ」。大統領になったウィルソンは「連邦政府のすべての機関での人種隔離政策を推進した」。ウィルソンは自ら弁明して、「隔離政策は実は黒人の利益になる」と述べた。注目すべきはフランクリン・D・ルーズベルトの態度である。のちに自ら大統領になるこの人物は、当時、ウィルソン内閣の海軍長官だったが、「ウィルソンが強要した法的な隔離に全く反対しなかった」。

ドゥスーザはさらに、ウィルソンは、人種的階級が存在するという考えを信奉していたと述べる。すなわち、人種によって「進化」の度合いが違うというのである。たとえば、「東洋人(Orientals)」は、進化した人種ではあるが、墮落してしまっているのです、基本的には黒人や褐色人種と同レベルまで落ちている、とウィルソンは確信していた。もちろん、白人よりも下位に位置するという意味である。ウィルソンの背後関係や人種に関する考え方を考察してみると、なぜ彼が、日本が提出した「人種平等」案に反対したかがよく分かる。

日本に対して核兵器を使用したのは、究極的にはハリー・トルーマン大統領の決断だった。トルーマンがこの決断を下したのは、1945年7月25日のことだった。そして、彼の伝記作家たちの説く所によると、第一に優先されたのは、どうしても日本に降伏をさせたいという彼の願望だったということになっている。本書もそれ以上立ち入って、トルーマンの人種差別思想が日本への核兵器の使用を決定する大きな要因になった可能性に触れる所までは行っていない。しかし、トルーマンの政治的背景を考えてみると、想像を絶する破壊的な兵器を非白人種である敵に対して使用することは、彼にとってはさほど困難な決断ではなかったと言えそうだ。核兵器がもう一年早く開発されていたとしても、トルーマンがベルリンを核の廃墟にしてしまう命令を出していたと考えられるだろうか。

ドゥスーザは、トルーマンの成長過程についてもっと深く調べるべきであった。他の箇所でも、ドゥスーザは、トルーマンが「私は暴力的な偏見を持った南部人の間で育った」¹と述べていることを指摘する。トルーマンの弟妹は、「ニガー」に対する軽蔑感を公然と述べ、ハリーもまた同じ気持ちだったと言っている。1911年6月22日に、やがて妻となるベス・ワレスに送った手紙の中で、彼は有色人種を侮蔑している。「人間の価値の違いはないと私は思っています。ただし、その人が正直で上品であって、かつニガーでも中国人でもなければの話ですが。アンクル・ウィルズは、『神は埃(ほこり)から白人を作り、泥からニガーを作り、残りを投げたら、それが中国人となって落ちてきた』と言っています。アンクル・ウィルズは中国人と日本人を嫌悪しています。私も同じです。それは人種的偏見だと思います。しかし、私の強い確信は、ニグロはアフリカに、黄色人種はアジアに、白人はヨーロッパとアメリカにいるべきだということです」。ベスも非白人とは付き合いたくないという点で彼と同意見だった。そして、「黒人は黒人の学校、我々は我々の学校を持つべきだ」と述べている。

トルーマンの黒人に対するこの偏見は、大統領の任期中変わることはなかった。それでも、1948年には、軍隊内の人種差別を撤廃する行政命令に署名している。(1948年、トルーマンは大統領選挙を目前にしていた) それにもかかわらず、米軍は朝鮮戦争の時まで、隔離政策を維持した。軍がついに白人部隊に黒人を入れなければならなくなったのは、トルーマンの命令のせいというよりは、戦時中の人員補給の必要性に迫られてのことだった。トルーマンの中国人に対す

¹ ルクテンバーグ, W.E.(2005) *The White House Looks South*. Baton Rouge LSU Press

る考え方は、時の推移とともに多少は変わったのかも知れない。1944年、トルーマンはサンフランシスコのチャイナタウンを訪問し、「この中国人は素晴らしい。私が信頼している有色人種は彼らだけだ」と言ったとのことである。

トルーマンが大統領の任期中、日本人に対して、正確に言ってどのような感情を抱いていたかは、あまりはっきりとはわかっていない。しかし、どうも彼は、日本人を「下流人間」だと思っていたようであり、また、第二次世界大戦中には、たいていの米国人と同じように、「よい日本人は死んだ日本人だけだ」と言っていた。彼の上司だったフランクリン・D・ルーズベルトは、日本民族は不要な存在だと信じていた。²トルーマンは、原爆を投下した後、日本人を「野獣」と呼んだ。トルーマンの「白人優越主義」の考え方は、実は民主党の党是だったのであり、党員は誰も、核兵器で非白人の都市を蒸発させようという計画を取って妨げようとはしなかったらしい。

本書は、共和党は、「人種差別主義の民主党」に対抗してバランスを取る歴史と役割を担っていたと述べる。本書が書かれたのは2016年のことであり、出版されたのは同年の米国の大統領選挙の前だったので、出版の目的は民主党とその大統領候補を窮地に追い込むことだったと推察する向きもあろう。読者がドゥースーザの話を読んで、投票日に影響を受けたかどうかは定かではない。しかし、もう一つ重要なことは、ドゥースーザの指摘が2016年以降にも警鐘を鳴らし続けるかどうかということであろう。

とはいえ本書の真価は、民主党の歴史を遠慮会釈なく暴露していることである。それは、ドゥースーザの言葉を借りれば「白塗り」の歴史であり、国際的国内的にもっと広い注目を浴びてよいはずのものである。本書の限界は、ドゥースーザが、民主党的な考え方の社会的政治的な影響を、米国国内での影響に限定している所である。つまり、民主党の非白人に対する感情を国際的なレベルでは検討していないのである。民主党政権下で、日米は様々な重大なやりとりを行ったのであるから、将来日本と米民主党政権がどのような関係に立ち入ってどのような結果を

² FDR (フランクリン・ルーズベルト) は、著書「Shall We Trust Japan?」 (Asia, July 1923) の中で、日本について好意的な態度を示し、日本人が「尊厳と高潔さを持つことは広く知られている」と述べ、かつ、米国と日本がたがいに協力できるような共通の基盤を見出すことを希望したが、日本人が米国に移民して来ることには反対した：「米国については、認めなければならないことがある。米国人は——オーストラレーシア (オセアニア) の人々もカナダの人々も同じ確信を持っているが——広範なスケールで白人が東洋人と混血することになったら、我々の将来のアイデンティティはどうなってしまうのだろうと真剣に憂慮している。その憂慮の当然の結果として、外国人および混血によって生まれたその子孫が、不動産や土地を過剰に保有することに反対するのである。率直に言って、米国人は、同化不可能な移民を市民として迎え入れたくはないし、また市民権を持たない人々が広範な土地を保有することをも望んでいない」 ルーズベルトは自分の立場を正当化するために、日本人はみな同じ考え方をしていると主張している (Robinson, G(2001) *By order of the President*. Cambridge, MA; Harvard University Press)。第二次世界大戦中、ルーズベルトは、日本人を他のアジア人と混血させることによって、「日本問題を解決できる可能性」について諮問している (Robinson, G(2012) *After Camp: Portraits in Midcentury Japanese Life and Politics*, Oakland, CA: University of California Press)。

招くかを予測するためには、民主党がどのような信条を持っているかをきちんと説明することがどうしても必要になって来る。その信念がすなわち民主党の行動を形成することになるのは言うまでもない。逆に、日本は共和党からはどのような扱いをされると予想しているのだろうか。共和党の信条はどのようなものなのだろうか。

ドゥスーザは共和党を本書の中では善玉のヒーローにしている。しかし、非白人に対する共和党の態度はあまり明白にはなっていない。連邦議会の民主党は、2007年の「慰安婦」問題の決議案に賛成した。このとき、民主党員であるダニエル・イノウエ上院議員はこの問題に関して慎重な態度を取るよう要請した。一方、当時下院外交委員会の委員だった共和党幹部のイリアナ・ロス・レイティネンを始めとする少なからぬ共和党議員が民主党に同調して、日本を弾劾し、日本は「謝罪」をすべきだと要求したのだった。このとき現れたのが共和党議員ダナ・ローラバッカーだった。彼は、この決議を通すことにどんな意義があるのかと疑念を呈した。日本は「米国の信頼できる安全保障上のパートナー」ではないかと言うのである。そして、「アジア・太平洋地域の安定性を高める役割」を果たしてくれたゆえを以て、日本を称賛した。もっとも、ローラバッカーは結局はこの決議案に賛成票を投じてしまったのではあるが。

さらに別の共和党員、ポン・ポールとトマス・タンクリードの両下院議員が現れた。二人は、同僚の下院議員たちが、日本に永遠の謝罪を要求していることを批判した。しかも、現在の世代の日本人が責任を負う必要の全くない基本的には政治的な日韓間の問題について、恣意的に一方に加担するのはおかしいというのである。（ポールとタンクリードは決議案に反対票を投じた）もちろん、共和党員がすべて歴史的な問題について日本に味方し、民主党員はすべて、日本が歴史について「間違った解釈」をしていると非難するものだと決めつけるのは賢明でない。しかし、日本人は、米国の二大政党の違いについて十分には理解していない。二大政党の歴史をもっとよく理解すれば、その行動形態をもっとよく理解できるようになるのではないだろうか。

ドゥスーザの本書はその理解への第一歩である。